

『彫刻とポストモダン』 ロザリンド・クラウス

2005年6月8日

小椋なつき・石原桃子(サマーピーチ班)

1. はじめに

この論文の著者ロザリンド・クラウスは、ポストモダニズムにおける彫刻の拡張について詳しく述べている。その中でモダニズムとポストモダニズムは完全に断絶されたと考え、ポストモダニズム彫刻の可能性を称えている。

今日の発表では、その文献をもとにモダニズムとポストモダニズムにおける彫刻の流れを追っていき、それを確認した上で、ポストモダニズムの新たな彫刻の形「アース・アート」をみていくことにする。

2. 彫刻の流れ

<モダニズム前>

●彫刻の論理とモニュメントの論理

象徴性→記念的な再現=表象となる。

台座は現実の場所と、再現=表象的な記号を媒介するための大切な役割を果たす。

<モダニズム～ポストモダニズム間>

●モニュメント論理の失墜

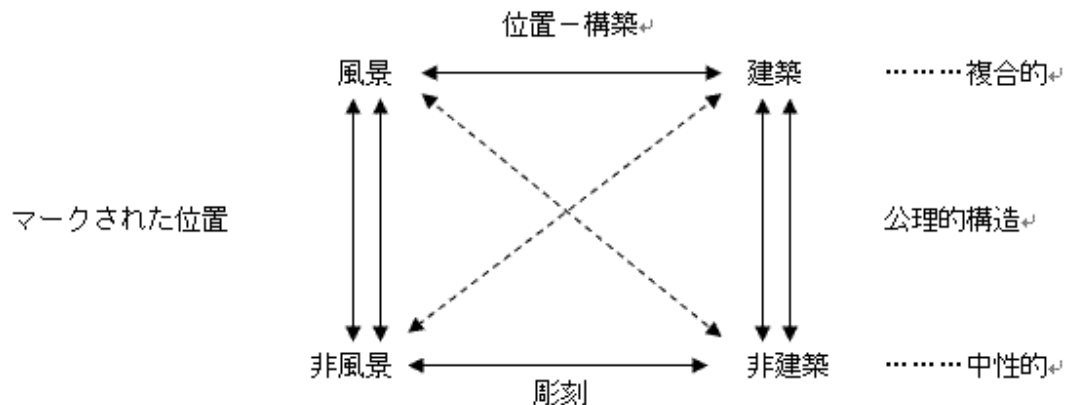
ex.「バルザック像」「地獄門」オーギュスト・ロダン 1897

非構造的

場所の喪失→彫刻制作におけるモダニズムの時代へ

※抽象的で、機能上は意味をもたない

<モダニズムにおける彫刻>



- 位置—構築・・・その場所に対象を構築すること
ex. ロバート・スミソン「部分的に埋められた丸太小屋」
- マークされた位置・・・位置をマーキングすることによる、その場限りの強調
ex. クリスト「ランニング・フェイス」
- 公理的構造・・・建築プラス非建築 他の媒体を現実の建築空間に干渉させる
ex.ロバート・モリス 「鏡の立方体」

※彫刻はひとつの周縁にすぎなくなっている

3. ポストモダニズムの新たな彫刻 “アース・アート”

- ・大地に痕跡を残す(美術館の外へ)
- ・主に美術館で写真による鑑賞(実際の鑑賞も可能)
- ・ミニマリズムの影響
- マイケル・ハウザー『ダブル・ネガティブ』(1969-70)
- ロバート・スミソン『スパイラル・ジェッティ』(1970)
- ウォルター・デ・マリア『ライトニング・フィールド』(1977)
- クリスト&ジャンヌ・クロード『ヴァレー・カーテン』(1972)

<変化した作品の場>

- アース・アートのもたらした影響⇒作品＝展覧会
 - ・シャンプル・ダミ ゲント(ベルギー)(1986)
 - ・彫刻プロジェクト ミュンスター(ドイツ)(1977)

4. 考察

これまで見てきたように、ポストモダニズムにおいて展開された新しい彫刻は美術館の中ではなく、その外に存在している。それによって私たちと彫刻の距離は一気に近づいたように見える。しかしアース・アートは、自然を利用した大規模な形態をとっていながら写真・映像での鑑賞が主となっており、観客が現地に出向くことはまれである。作品が自然や外に向く事によって受け手との位置が近くなるのだとしたら、この状況はおかしいのではないだろうか。実際にそこに行き、鑑賞しなければ意味がない。写真、映像だけではむしろアース・アート自体が本当にあるのかさえ疑いたくなる。アース・アートは自然さえ作品にしてしまうという壮大なものであった。その結果、彫刻というカテゴリーの境界線や既成概念は曖昧になる。これがポストモダニズムの大きな特徴であると思う。この状況はなんでもありといったような無法地帯ともとらえられるが、私たちに自身に作品についての選択や判断をゆだねてくれる状況ともいえる。

しかし、アース・アートのような新しい彫刻の形が生まれているにもかかわらず、私たちは一般的に「彫刻」と聞くと、いわゆるモニュメントのようなものを想像してしまう。これは、現代に生きる私たち自身が未だに「彫刻というカテゴリー」に支配されていると考えられるのではないだろうか。

作品が美術館を飛び出した今、彫刻の新たな展開はあるのだろうか。彫刻のような立体芸術は行き場を見失いつつあるような気がしている。立体であることの意義とはなんだろうか。単なる「三次元だ

からリアルに感じる」という要素だけではなく、他に私たちが惹きつける要素があるような気がしてならない。それを感じ取ることが、私たちの役目であり、彫刻というものの行き場を見つける動機につながるのかもしれない。

<用語集>

● アース・アート

別名ランドアート。1960年代末のアメリカで発達した、自然を直接の制作素材とする表現様式。美術館への収蔵が不可能なため、もっぱら写真を通じて鑑賞するその形態は、69年のドゥレ画廊での観展で認知された。人間と自然の交感をテーマとしている点では一種の環境芸術と言えるが、この運動に加担した作家はほとんどが「ミニマリズム」の出身であり、また現象学や場所論を理論的支柱としている点では同時代の「アルテ・ポーヴェラ」とも共通していて、この形態がベトナム戦争等の背景をもつこの時代との密接な同調のもとに発達を遂げたことがわかる。大規模な土木作業を必要とするため、一部に自然破壊との批判もあり、また理解者の金銭的支援が受けられなくなった70年代には後退。

● ミニマリズム

1960年代のアメリカで主流を占めた美術運動。非遠近法的な空間構成やイリュージョンの排除といったその特質は、「キュビズム」や「構成主義」に端を発する20世紀美術の重要課題のなかにあるものだが、結果的には50年代の「抽象表現主義」が次世代の動向としての「ミニマリズム」を準備したと言えるだろう。批評家B・ローズはそうした動向が60年代の主流をなしていることにいち早く着目して「ABCアート」と命名したが、現在ではより美学的に対応している「ミニマリズム」の呼称が定着。そもそもは絵画から着手されたが、その“純粹視覚性”が最も発揮されたのが立体であり、60年代末に極限を向かえたのは衆目の一致するところである。

<参考文献>

- ・松井みどり『アート：“芸術”が終わった後の“アート”』2002 朝日出版
- ・M・Aロビネット『屋外彫刻 [オブジェと環境]』1985 鹿島出版会